

やり切った

ノートルダム清心高等学校

澤原理乃

図書委員歴五年。

どのスポーツよりも長くこの仕事を続けて来た私は、人に趣味を聞かれた時は無難に本を読むこと、と答えている。けれど、詳しく言うところがう。

私の趣味は、『返却された本のコーナー』の本を読むことだ。

普段、私が自主的に借りる本は絵を描くときの資料になる色見本や風景の本、あと名前を聞いたことがある作家の短編集がほとんど。実は、長い間図書委員をしている割にそんなにたくさんの本を知っているわけでもないし自分から新たな本を開拓していくのは得意ではない。こういう時に役立つのが『返却された本のコーナー』だ。そもそも借りた人が面白そうと思わないと本は借りられることはない。要するにここにある本は必ず面白い、ということだ。

私はその日もこの『返却された本のコーナー』のことを考えていた。このコーナーが最も充実するのは月曜日。土日にかけて本を読もうと思って借りた人が返却するからだ。さてさて今日のラインナップはどうだろうか。英語の文法の本、数学をわかりやすく説明した本、科学雑誌……。その日のラインナップは私にとってあまり面白くなかった。どれも開拓のために一度は手を出したけれど、借りた後、読む気が起こらなくてただの荷物になったことのあるもの達だった。

私は、ふと小説のコーナーに目を移した。

私はその頃、長いこと小説を読んでいなかった。理由は二つ。一つは面白い装丁の本や奇抜なアイデアの光る本が毎月のように発売されるので、そっちの開拓に力を費やしていたため。もう一つは私が『読み切る』という事を苦手としているためだった。

私は、うだうだと悩んだ挙句、一冊手に取った。題名だけ聞いたことのある本だった。

結局、借りてから一週間たっても私が読んだのは本当に最初のところだけだった。私はこれからもただの荷物になることを予想し、本を返却するため図書室の返却コーナーに向かった。

先客がいる。

その子は中学一年生くらいだった。その手には、深いえんじ色のとても面白くなさそうな本が抱えられており、その子はその本をもう一度借り直していた。借り直したその瞬間からその子は椅子に掛けてもう一度読み始めた。高校生の私が最近で最も真剣に読んだのは国語のテストの文章なのに。その子の真剣な横顔を見ていると、私の中でふつふつと新たな感情が沸き上がってくるのを感じた。

私は、返しに来たその本をもう一度借り直した。

私は、今更、本は最後まで読み切ったところで本当の面白さが分かるものだという事に気付かせられた。私はそこから『小説を読み切る』という当たり前にも見える行為にはまった。語り口調が面白くないと放り出してしまっていたミステリーには予想外の展開があって驚いたし、何を言っているのかわかるわけがないと放り出していた文豪の本も読んでみるとその時代の人の生活や倫理観のようなものが見えてとても面白かった。

私は、この『読み切る』と言う行為から、何でもあきらめないことへの大切さを学んだ。物語は最後まで読み切らないとハッピーエンドかバッドエンドかなんてわからない。私の人生も、夢がかなうか分からない、その夢で本当によかったのかなんて分からない。

夢を叶えなければすべては始まらない。

私は、今日も『やり切った』その瞬間まで走り続ける。